Epilogue エピローグ

　手を伸ばせばの指先も見失う濃霧の中で、彼女は血肉の海に浮かんでいた。

　ここ数百年、足場にしていたお気に入りの一体はいなくなっている。だから幼い少女の姿をした怪物は、けになって血肉の海に浮いていた。

　あともう少し。ほんの一押し。手に届くところに、自由があった。大地に足をつけることができた。海を血で染められた。空を万魔で埋めつくせた。

「興ざめだわ」

　冷めた声は、魔物が食い合う音にかき消される。

　広く広い霧の中。かつて南方諸島連合と呼ばれていた国家を丸ごとうな白露にわれながらも、彼女は霧から切り離した自分の一体との接続が絶たれたことを把握していた。

　世界に自分が放たれるなら、小指の一本が人に戻ろうが気にしない。

　だが、いま外に出られるのがその小指一本だけとなれば話は別だ。

「よくないわ。とってもよくない。あたしが目的を持つだなんて、ねえ？」

「まったくだわ！」

　賛同の声が上がった。

　まったく同じ容姿をした幼女だ。あらゆる背景を無視すれば、双子の会話に見える。違う点があるとすれば、話しかけたほうの指が欠けていることだろう。自分の指を使って、肉人形の分身をつくっているのだ。

「追いかけましょう」

「追い詰めましょう」

「追い込みましょう」

　薬指、中指、人差し指、親指と五指のすべてがなくなって、口々に述べた先から、血肉の海に浮かんでは霧の重みに耐えかねてれていく。ただの指人形が動き続けるには、過酷な環境だ。

　見るからに奇妙な一人遊びだ。霧に包まれ、魔物を閉じ込め続けるこの場所で会話をする意味などない。すべての人形は潰された先から、幼女の指に戻っていく。

　最初から意見は一致していた。そもそも意見などなく、すべてが彼女の指人形でのお遊びでしかないのだ。

　欠けているのは、小指だけ。

　は霧にある、わずかな亀裂を見つめる。万全の結界に入った亀裂は大きく広がりながらも、霧は彼女の身にまとわりついて離れない。あとほんの一押しで消え去りそうなのに、その一押しが足りていない。

「まだまだね」

　千年の霧はまだ晴れない。幾億千万が食い合うは終わらない。たかが小指一本が正気を取り戻したところで、常世にる彼女を止められる道理はない。

　永遠などないことを、概念の体現者と化した彼女はよくよく知っている。

「【白】の忍耐は、いつまで持つかしら」

　この霧ですら、いつかはなくなることを疑っていない。

　己が解き放たれることを思って、万魔の主はに笑った。

　つくり物の世界を巡る白夜は、地平に転がり落ちる寸前だ。

　昼も夜もない時間の閉じた世界は、もう少しで初めての夜を迎えるところだった。

　だが、白い太陽はあと少しというところで持ちこたえた。

　原色概念でできた世界の中、意思なき魔導人形が定められたルーチンを繰り返す。こともなく営まれる『り』の中心部に、例外の個体が集まっていた。

「まったくよー。夜が明けるつっても、外の世界とわってもいいことなんかねえんだから、結論なんて決まってるだろうが」

　例外の一体であるは、中心区域である一区へ向けて四本足を進めていた。

　美しい青い毛並みを持つ狼は生物ではない。硬質な質感を隠そうともしていない。魔導兵だ。しかし魔導兵でありながらも、原色概念の繰り手に囚われていなかった。

　模倣と擬態の段階を超えて自我の獲得に至った、鉱石生命体。

　三原色の魔導兵。

　彼のみならず、『絡繰り世』にいる中でも高位の魔導兵が中心にある校舎に集まっていた。『絡繰り世』全体として今後の方針を決めるための区長会議が執り行われるのだ。

　それが狼にとってみれば、まりなかった。

　実のところ、自我を持った魔導兵というのは基本的に仲が悪い。元は同じ【器】からできたというのに、三つの色ので性質が変化するため十三に分けられた区ごとで文化と思想の発展が著しく異なるのだ。

「我らがお父母さまは、もうアレ恨み言き装置じゃん。他の区長とは分裂しすぎたし、人類となんてもっと話合わないし？　たちが生まれた時から閉じてる世界が開かれても、逆に困るんだよね。だからこその新天地計画だけどさぁ……全員は乗れないでしょ、あれ。どーすんだろ」

　青狼は同意を得るために振り返った。

　静かすぎて不審だという心もあった。いつもはスーパーやかましい存在のくせして、としすぎである。もしや会議を前にした精神負荷で思考回路にバグでも発生したかと心配になったのだ。

　そこには、目当ての魔導兵はいなかった。

　代わりに、明らかに即席で作ったとわかる箱型の音声導器が置いてある。

『お外で生まれた子が心配。お姉ちゃんはみんなのお姉ちゃんだったけど、今日から少しの間、お外で生まれた子のお姉ちゃんになるね？　探さないでください。一区で集まる年長の兄姉どもはジィ君がスクラップにするのが義務だから、ガンバッテ！』

　自立思考を持たない魔導具が封入された音声を再生する。伝言だけ残して逃げやがったことに気がついた狼は、全身を震わせる。

「あのクソバカ姉がぁ！　俺に押し付けやがったな!?」

　巨大な青狼の遠吠えが、つくりものの世界に響いた。

　＊＊＊

　支給された神官服に、まず裁断ばさみを入れた。

　モモの感性からすると、神官服のデザインは堅苦しい。特にスカート部分は顕著だ。基本的に内勤向けにデザインされているため、純粋に足回りがよくないという欠点もある。ある程度の改造は黙認されているので、ためらいなくハサミを動かしてほつれを処理し、布地を足しては針と糸を通して裁縫でスカートのにフリルをつくっていく。

　神官服の改造はメノウの補佐になるために白服を受け取った時に、一度こなしている作業だ。【障壁】紋章に干渉しない改造方法がわかっているため、悩むことはなかった。

　モモの裁縫の腕は熟練工の域にある。ミシンを使わずとも、出来上がりまで三時間もかからなかった。

　モモは改造を終えた神官服を着用して、姿見の前に立つ。

　おかしな点がないか、身体をひねりながらチェックをしていると、ノックの音が響いた。

「どーぞ」

「はーい！　って、あれ？」

　お気楽な口調で入室してきたのは、フーズヤードだ。彼女はモモの姿を見てする。

「わっ！　似合ってるよ、モモちゃんさん」

　まずは見たままに褒めてから、思案顔に変わる。

「でも支給されて即改造するのはどうかな。あんまりいい顔はされないと思うよ？」

「お偉いさんの顔色なんて、どーでもいいです。私にとって、服装にはかわいい以上に大切な要素はないんですから」

　忠告をあっさりと受け流す。

　フーズヤードは苦笑した。そして改めて、モモの着ている神官服の色を祝福する。

「白服もよかったけど、藍色も映えるね。モモちゃんさん、、改めて正式に神官になって、おめでとう！」

「ええ。どーいたしまして」

　聖地での騒動から、およそ一か月。モモは正式な神官として認定された。

　事件直後のモモは軽い聞き取り調査の後にすぐ解放された。お人よしのフーズヤードがモモの無実を主張していたとはいえ、あまりにも手ぬるく終わった尋問には理由がある。

　実のところ、公式の記録としてモモがメノウの補佐官であるという記録は残っていない。

　正式な記録として残るモモの経歴は、白服となって巡礼神官となり、聖地に戻ってきたところをエルカミに見出され、フーズヤードの補佐をしていた、というものだ。

　処刑人はの暗部だ。誰もが目にできる公文書に活動記録を残すことはない。

　もちろんが統括していた修道院には記録があるのだが、メノウが事前にすべてを焼き払った。この行動自体はメノウが逃亡する際に自分の記録を抹消するものと判断されたが、真意はモモの経歴を白紙にすることにあった。

　処刑人の補佐であったモモは、真っさらな経歴を手にした。正式な神官としての認可を受けるべく偏っていた教典魔導を習得し直し、一か月で藍色の神官服をまとえる真っ当な神官となった。

　メノウが指名手配された時に、モモはの内部に残ることを決めた。内部に協力者がいるほうが、メノウに貢献できるからだ。メノウがいなければ補佐としての立場は必要ないのでより自由度の高い立場になった。

　それは、もう一つの頼まれごとのためでもある。

「少し前から準備してたけど、モモちゃんさんは巡礼神官に戻るの？」

「……ですね。私を取り立ててくれたエルカミ大司教も、もういないですしね」

　モモにとっては都合のいいことでしかないが、エルカミは行方不明になった。誰があれほどの魔導行使者に害をなせたのかと首をげる事態に、まだ聖地のざわめきはおさまっていない。

「そっかぁ……あ、荷物入れはわたしが作ったのを使ってくれてるんだね」

「そりゃ、そのために造らせたんですよ」

「あはは……」

　聖地を出ることを決めていたモモは、導器製作の技師でもあるフーズヤードに旅荷物を入れるためのケースを作らせていた。小柄なモモの腰ほどの、車輪が付いているキャリーケースだ。頑丈に作ってあるので、モモが武器にしていると組み合わせれば面白い使い方もできる。

「でもなんでキャリーケースの材料を導力遮断の素材にしたの？」

　旅行具を紋章具にするのは巡礼神官にはままあるが、わざわざ外枠に導力を遮断する素材を指定するのは珍しい。地脈の流れをいじる際には導力を遮断する素材も必要だからこそフーズヤードの知識と技術のだったが、並みの技師なら請け負えない恐れすらある注文だ。

　モモはこともなさげに答える。

「お前みたいに、導力でのぞき見できる奴がいることを知ったからですね」

「うぐっ。……え、えっと、ちなみに私は部署転換だよ。モモちゃんさんとは、お別れだね」

「そーですか。聞いてないですし興味ないです」

　手痛い返答に話を逸らす。大聖堂の『龍門』が壊されてしまったために、フーズヤードは聖地での役職を失った。復興作業でうやむやになっていた彼女の立ち位置も固まったらしい。

「それじゃ、失礼します。お前に閉じ込められた恨み、絶対に忘れませんから」

「あはは……え、その本気の目はやめて？」

　フーズヤードに見送られ、モモは外に出る。聖地の白い街並みを抜けて、巡礼路を歩く。

　しばらく進んで、立ち止まった。来る時はアーシュナを待ち伏せするために登った木だ。疲れてはいなかったが、休憩するために真っ白なキャリーケースに腰掛ける。

　メノウが生き方を変えることを決意した夜、モモに伝えていたことがあった。

　──ねえ、モモ。どうして異世界人を問答無用で殺すなんてことができると思う？

　──危ないからじゃないんですかぁ？　異世界人は危険な存在ですぅ。リスクを排除するのが間違っているとは、思えませんー。

　モモの答えに、メノウは首を横に振る。

　──彼らの家族が、この世界にいないからよ。

　異世界人の人権がないものとして扱われている理由を、はっきりと告げる。

　──この世界に来たばかりの『迷い人』は、ともなんのつながりもない。だから彼らが殺されても探そうとする人はない。彼らがいなくなったことを悲しむ人もいない。わかる？　本質的な部分でね、『迷い人』は弱者なの。

　メノウは罪を犯した。この世界に来たばかりの異世界人を何人も殺し続けたという罪だ。

　メノウは加害者であり、彼らは被害者なのだ。

　──は討滅すべき存在よ。でもね、この世界に来る『迷い人』は、異世界人だから悪いわけじゃないわ。この世界に来る人たちが、殺されてしかるべきなんてことは、ないの。

　──わかりますけどぉ……なんでモモに言うんですかー？

　──モモがまだ、彼らを一人も殺してないから。

　白服を受け取ったとき、モモはすぐにメノウの補佐となるべく彼女の元にはせ参じた。神官になる理由が『メノウのため』以外に存在しなかった。

　そしてメノウは、モモに多くの仕事を任せることはあっても唯一、異世界人の殺害だけはやらせなかった。

　──モモは、異世界人の尊厳に触れてないわ。彼らがあなたを裁く理由が、一つもないの。

　でも、と訴えた。自分だってきれいな手をしているわけではない。白手袋をはめた両手を広げてメノウと罪を共有しようとした。

　魔物やテロリストといった純粋に害になる者だけではない。使命感や命令に従っただけの騎士を戦闘の末に殺害したこともあれば、そこら辺の大した害もないチンピラに拷問まがいの尋問をすることもある。

　──彼らと異世界人とは、まったく別だもの。

　けれどもメノウは、モモに自分の罪悪感を切り分けるをしなかった。

　──次に、なんの罪も犯していない『迷い人』が現れたら手を引いてあげられるのは、モモだけよ。

　それはメノウが、自分では決してできないとめた道を託した言葉だ。

　納得はできなかった。モモにとって一番重要なのは常にメノウだからだ。大好きな先輩の頼みだとはいえ、メノウのためにならないお願い事を聞く意味がない。

　それでも引き受けたのは、やっぱりメノウのためだった。

　周囲に人目がないことを確認してから、座っている箱をで軽く蹴る。

「……お前と一緒に歩いてるって思えないくらい、静かですね」

　一人旅に出たモモは、キャリーケースの中に入っている人物── 停止したアカリに語りかけた。この一か月間、メノウから聞いた存在『主』は確たる動向を見せなかった。メノウからアカリの体が安置されていた場所を伝えられたモモは、旅立つ直前に荷物を入れ替えたのだ。

「先輩から頼まれたんですから、相手が誰だろうと守ってやりますよ」

　大好きな先輩のお願いごとを叶えるため、世界を変えるため。

　モモはモモなりの旅を始めた。

　モモを見送ったフーズヤードは、ぐうっと一伸びした。

　今日は部署替えだ。辞令内容は呼び出された部屋で知らされるらしい。フーズヤードの他、後輩が一人配属されるということだけは事前に聞いていた。

　今度の同僚は、モモよりは少し年上で、十代後半の白服神官らしい。

「モモちゃんさんとはなんだかんだで仲よくなれたけど、次の子はどうかな」

　期待と不安を半々にして、呼び出された場所へ向かう。

　フーズヤードとしては、正直、『龍門』のない聖地には魅力を感じない。モモと同じく聖地所属を辞して巡礼神官となり、各地を旅しなおすのもよかったのだが、問題がひとつ。

「あの壊れた駅を放置したら、エルカミ大司教、絶対に激怒するよね……」

　上司への恐怖がフーズヤードを聖地に引き止めていた。

　大司教のエルカミは行方知れずになり、内では死亡説すらささやかれている。だが、フーズヤードはエルカミの生存を疑っていなかった。

　あれほど完全な【力】が世界から消えることが、想像できない。

　きっとエルカミが戻ってきたら、また怒られるのだろうとげんなりしながら、呼び出された一室に入る。

「こんにちはーっ、はじめ……まし、て？」

　室内には、十代後半に見える茶色髪の少女がいた。

　強さとしなやかさを感じさせる顔立ちだ。気難しい性格なのは、厳しい表情をした鋭い目つきでわからされる。真面目そうというべきか、厳格さを全身から発しているというべきか。きっちりとした美人なのだが、硬い態度は内面のもろさを隠そうとしている裏返しにも見えるため、アンバランスな印象を受ける。

　彼女の姿に、既視感を抱いた。

　フーズヤードは反射的に自分のメガネに刻んである紋章魔導を発動する。

『導力：接続── 眼鏡・紋章── 発動【導視】』

　レンズを通して視えた【力】は、奇跡だった。

　人であって人にない完全に等しい導力の巡りには、見覚えがある。

「あのぅ……エルカミ大司教のご親族だったりします？」

　自己紹介も忘れて語りかけると、少女は不愉快そうに眉間にしわを寄せた。そんな仕草まで、どこか似ている。

「エルカミ……ミカエルのアナグラムか。なるほど、ハクアさまのおっしゃる通り── 」

「あ、やっぱり知ってるの？」

「黙れ。に、身寄りがいるとでも？　くだらぬ質問を私にするな。不愉快だ」

「あ、う、ぅ……え、えへへ。ごめんなさい」

　圧が強い。自分が先輩のはずなのだが、フーズヤードは相手の言動の強さに愛想笑いを浮かべて謝っていた。

　は縁故による悪習を防ぐために、身寄りのない女児から魔導適性のある者を引き取って育成している。孤児である人間の身元を探るのはセンシティブなことに触れかねない質問だった。

　それでもそんなに怒らなくてもと身をすくめながら、フーズヤードはちらちらと相手の導力を確認する。

　本当にエルカミではないのか。改めて見ても、少女と老女の肉体的な差はあれど導力の経路が同一だ。年齢が離れすぎているために同一人物のはずがないのに、【力】の観点からすると同じにしか見えないのがフーズヤードの混乱を誘っていた。

「私は勇者さ─……『主』にお仕えするために神官になった。にるために、すぐさま階位を上げてお役に立つつもりだ」

「うわ、熱心だね」

「当然だ。御方にはご恩があるからな。貴様がどの程度か知らんが、足を引っ張るなよ」

「ご恩？」

　まるで『主』に直接会ったことがあるかのような物言いに、首を傾げる。教典に書かれた『主』は実在の人物とされているが、存命していたのは千年前だ。

　フーズヤードの疑問符に、少女は失言したとばかりに舌打ちした。

「なんでもない。さっさと忘れろ」

「そ、そう？　それで、えっと……」

「私のことは、ミシェルとでも呼べ」

「わかった、ミシェルちゃん。それで、私たちの次の配属ってどこ？」

「そんなことも知らないのか？」

　質問に鼻を鳴らして返された。

　とてもナメられている気がするが、自分が威厳とはほど遠いことを自覚している上にモモの時で慣れたフーズヤードは相手の態度をあっさり受け入れスルーした。

「『主』の敷いた法のもとで罪を裁く正義── 異端審問官だ」

　これっぽっちも興味もない役職に、やたらと真面目でやる気をみなぎらせている前の上司そっくりの後輩。

　ミスマッチの現場すぎると、フーズヤードは内心でさめざめと嘆いた。

　大陸北部。

　まだ雪がちらつく季節ではないが、肌寒い風が吹き始めている。一年の半分以上を占める冬の季節の気配が近づいている。

　毎年訪れる厳しい冬を乗り越えて生活を営む街の片隅で、隠れるようにして稼働している魔導工房がある。

　人間の生活圏で、導力を利用して作動する導器の需要は高い。凶器となるような紋章具はにより大きな規制がかかっているが、魔導操作の技能を必要とせず、スイッチのオンオフで稼働する生活必需品レベルでは様々な導器が普及している。

　照明、炊事、水道設備にと人の生活を支える導器もメンテナンスが必須だ。需要に応えるべく魔導知識を得た専門職人は高給取りとして知られている。

　そしてあまり知られていない事実だが、彼ら職人を切実に必要とするのは、普通に生きる人々よりも、やの目をかいくぐる必要のある人種だ。

　当然、多くの良識ある職人はに傷を持つ人間と関わることはない。そんな危ない橋を渡らずとも、多くのの市民から求められる立場にいる。

　だが、少数の職人は裏稼業の人間との取引に手を染める。

　金のために、あるいはやへの反発から、そして── の立場では届かぬ知識と技術を求めるあまり、禁忌という領域にまで走る。

　この工房は表向きでは導力灯の売買などをしながらも、後ろ暗い人間から紋章具の調整を請け負っている。

　治安維持を任された騎士や技術規制を敷く神官の目をかいくぐっている裏稼業の人種ご用達の工房に、一人の少女が訪れていた。

　面相にも服装にも特徴はない。一見すれば女冒険者の一人といったではあるのだが、よくよく見れば抜き身の鋭さを秘めていることに気が付くだろう。軽々しく触れただけで切り裂かれてしまいそうな印象がある。

　彼女は数日前に、武器の調整のため短剣を預けにきたのだ。

「できてる？」

「……ああ」

　言葉少ない応答。己の武器を返却された少女は、二本の短剣の刀身を確かめる。

　丁寧に導力を流し、紋章の発動にがないかを確認する。何気ない導力操作が、恐ろしく滑らかだ。男は目の前の少女が自分では推し量れない実力を持っていることを悟りつつも、湧き出る好奇心を封殺するために口をつぐむ。

　満足する出来だったのか、少女は短剣を納める。

「ありがとう。いい仕事ね」

「……研いだだけだからな」

「意外といないのよ。紋章を損なわないで武器を研げる技師って」

　礼とともに払われた料金を受け取りながら、男は自分の仕事を思い出す。

　少女から預けられたのは、ただの短剣ではなかった。

　魔導の発動媒体である紋章を刻んだ、俗に紋章剣と呼ばれるの武器だ。

　武器としての形状を保ちながら実用性の威力がある紋章を刻むのは高度な技術がなければ不可能だ。素材の組み合わせと導力回路の構成を加味して魔導紋章を成立させながら、短剣としての実用性を保たせる。複合的な専門知識と高い技術が必須となる。

　少女が預けたものほど高度な紋章が刻まれた武器となれば、ではなことがなければ手に入らない。町中での帯剣が許されたの騎士ですら、長剣の大きさで紋章を一つ刻む技術が限界だ。それ以上は、国宝級の秘蔵品になる。

　実用性のある片手武器に二つ以上の紋章を刻めるなど、の神官以外にありえない。

　だが、まっとうな神官がこんな後ろ暗い場所など利用するはずもない。神官たちは内部で魔導技師を育成して抱え込んでいる。

　に所属しているのならば、武器の整備は教会に預ければいいのだ。

　無意識のうちに探る視線になった男の疑念に気がついたのか、ふっと少女の唇がほころぶ。

「知りたい？」

　知りたいはずもない。

　無言で首を横に振る。

　客のをしないのが暗黙の了解だ。もし心当たり通りだったのならば、彼女の正体はあまりに恐ろしすぎる。

　本来ならば決して関わりを持ちたくなどないが、男は技術者の一人として教会謹製の紋章具の技術に触れたい欲求をえられなかった。依頼者の素性の危険性に目をつぶって後悔はない程度に、技術的好奇心は満たされる仕事だった。

「そう。やっぱり、いい店だわ。お礼に、二度と来ないでおくわね」

「……助かる」

　男がぼそりと発した感謝に、少女は穏やかにんで立ち去った。

　彼女の背中を無言で見送る。男も後ろ暗い立ち位置にいる人間だ。日常的に裏の情報を仕入れている。

　が一人の背信者をになって探していることは、すでに大陸中に知れ渡っている情報だ。表舞台で動く異端審問官はもちろんのこと、まことしやかに存在がささやかれるだけであった処刑人の動きすら活発化している。

　その人物が犯した罪状たるや、かのの虐殺者ゲノム・クトゥルワが引き起こした惨劇すらみかねない。

　聖地の大司教エルカミの殺害。人為的に『竜害』を引き起こして、永遠の結界都市と称された聖地を一度壊滅に追い込んだ背教者。他にもグリザリカ王国で大司教オーウェルの死に関わり、大陸最南端の町リベールで四大『』の封印に干渉して魔物を暴れさせたという噂もある。

　の恥部となる、史上最悪の裏切り者。

「……あれが『』か」

　悪であろうとも、間違いなく歴史に名を遺して語り継がれることになる人物だ。

　もう二度と関わることはないだろう。小さく呟いた男は、静かに己の仕事に戻った。

「遅い！」

　合流地点で少女を迎えた第一声は、ポップコーンのように小気味よくける文句だった。

　出会い頭に叱責を受けた少女は肩をすくめた。人目のないことを確認した彼女の顔が、ぱっと光る。

　導力の燐光が収まると、特徴のなかった顔つきから打って変わって美しい少女の姿が現れた。淡い栗毛に端正な面立ち。メノウである。先ほどまでは導力迷彩によって姿を偽っていたのだ。

「遅いって……時間通りよ？」

「待ち合わせの時間なんてものは、あたしが来た時に決まっているわ。あたしを一人で待たせるなんて、ありえないの。しっかり反省するのよ？」

　十歳前後の幼女は物怖じなどせず、はっきりとしたで叱責を続ける。

　幼い彼女は、一風変わった服装をしていた。白いワンピースの上に着物をり、帯の代わりにベルトを締めて留めているのだ。ちぐはぐになってもおかしくないのだが、彼女の幼くとも上品で整った顔立ちの助けによってファッションとして着こなされている。

「ごめんなさい。待たせたことは反省してるわ」

「本当に反省しているのか、怪しいわ」

　おしゃまでおしゃれな幼女がメノウをにらみつける。

「知らない町であたしが迷子になったらどうするのかしら。一人でいる時に誰かに誘拐されたらどう責任とるの？　あたしは、か弱くてかわいいのよ？　あたしみたいな美少女は、いっぱいの危ないに囲まれてるんだから、もっともっと守らなきゃいけないって認識をしっかり持ってよね！」

　素晴らしいほどに自意識にあふれた主張だ。メノウは無言のまま、口やかましい幼女の頭に手を乗せる。

　そのまま強めに圧力をかけてぐしゃぐしゃと髪をかき混ぜる。

「や！　髪が崩れちゃうわ！」

「はいはい。かわいいかわいい。マヤは髪の毛が崩れていてもかわいいから大丈夫よ」

「なにかしら、その反応。やな感じだわっ」

　メノウが手を離した頭を押さえる仕草も含めて、本当にの子供そのままだ。どこにでもいるませた女の子である。

　彼女は、メノウとマノンが聖地で交わした取引の成果ともいえる存在だ。のために『星の記憶』に踏み入ったマノンは最期の一手でハクアをき、の化前の人格を復活させた。死後すら投げ捨てた原罪魔導の献身によって『』の記憶を受け取り、千年前にえたはずの自我を取り戻して独立したのがマヤと名乗る幼女の正体だ。

「そこらへんの暴漢なら、導力強化でもして抵抗すればいいじゃない。問題にもならないでしょう」

「やよ！　あたし、あなたよりずっと導力が少ないのよ？　あっという間になんにもできなくなっちゃうわ」

「……じゃあ原罪魔導は？」

「なんてかわいそうなことやれっていうの？」

　ただのわがままに聞こえるが、まともな神経になると純粋概念由来の原罪魔導が使えなくなるのは仕方ない。肉体を生贄にげる原罪魔導は普通の倫理観をしていれば使えるものではないのだ。

「サハラにかけたのだって、すっごく勇気を出したのよ？　おかげで髪が短くなっちゃったもの」

　つんと唇を尖らせて、黒い髪先を指先でいじる。少し短めになった髪型もよく似合っているのだが、本人からすると不服らしい。

　聖地からこの町までの付き合いでいくらか慣れたが、とのギャップにはいまでも時々不思議な気分になる。もとの『』と同一視するのが難しいほどに無害でかわいらしい少女だ。

　実際問題、彼女とは別の存在なのだ。魔導的に同質であるが、精神が完全に別物として分離している。

「そもそもサハラと一緒にいたんじゃなかったの？　サハラはどうしたのよ」

「わかんない。サハラって隙あらば手を抜こうとするもの。マノンならしてくれたに違いないこと、なーんにもしてくれないのよ。せめてあなたは、あたしのために尽くしてよね」

　わがまま気ままに要求する彼女の存在は、メノウに希望をもたらした。

　本来ならば、は常に純粋概念の魔導を発動させている。記憶をぎ込んでも、片端から消費してしまうのだ。

　だが小指として独立していた彼女は、万魔を従える本体ほどに記憶の消費が顕著ではなかった。人格を取り戻した瞬間に、本体との接続を絶って自我を取り戻すことができたのだ。

　マヤの存在は、アカリを助ける余地があることを証明していた。

　となったアカリが純粋概念を行使することなくメノウが預かった記憶を導力接続で共有すれば、アカリを元に戻せることを意味している。



「あたしが貴重な情報を教えてあげてるんだから、お願いごとは当然ちゃんと聞いてよね」

「わかっているわ」

　メノウとマヤが行動をともにしている大きな理由として、目的が同じだということがある。これからの利害が完全に一致しているのだ。

　の『主』、シラカミ・ハクアの暗殺。

　ハクアの用意した異世界送還の魔法陣は、もともと星の自然現象として発生している召喚現象と密接に関わっている。

「だから、どんな手段を使ってでも、南にいるあたしを討滅して」

　それが、マヤの願いだった。

「あたしは、あたしの末路が許せない」

　南にいるが消費できなくなった場合、送還に必要な生贄がなくなる。

「日本への送還陣を損なわせれば、相互関係になっている召喚陣も壊れる。日本から無規則にび出される自然召喚も、それを利用していた人為的な異世界人召喚もできなくなる。……本当でしょうね」

「本当かどうかなんて知ーらない。千年前に大人が言ってたの、聞いてただけだもの。小難しい魔導理論が正しいかどうかなんて、子供のあたしが知ってるはずがないじゃない？」

　頰に人差し指を当てて、にこっと笑う。かわいらしくも憎たらしい無責任さだ。不確かな情報に、メノウはため息をつく。

　だが子供のと捨て置くわけにはいかない。千年前はいまとは比べ物にならないほど発展した導力文明を誇っていた。当時の研究者の見解だというのならば、十分価値のある情報だ。

　とはいえ信用することはできない。疑う理由はわずかとはいえある。

　かつて戦った時に、『』だった彼女は故郷へ少なからぬ執着を見せた。そうでなくとも、四大の発端はハクアの動機と同じく『元の世界に帰るため』だ。

「あなたは……元の世界に帰りたいんじゃ、なかったの？」

「いいの、もう」

　紙くずをゴミ箱に捨てるような口調だった。

「あたしね、褒められるのが好きなの。お歌も踊りもお芝居も、かわいくこなせば周りがちやほやしてくれるから好きよ。かわいいあたしを褒めてくれる世界が大好き」

　彼女は、愛されていた。大人の打算もあっただろうが、愛されていることを実感していた。

「だから、もう、いいの」

　彼女を一番褒めてくれた人は、この世界にも、元の世界にも、いない。

　理屈ではない。有無をいわせず、言葉通りに『もういい』という感情が伝わる声だった。

　空気を変えるために、別の話題を振る。

「サハラ、遅いわね」

「まったくね。あたしを待たせるなんて、サハラのくせに生意気だわ」

　噂をすればなんとやら。ちょうどよく、サハラの声が届いた。

「さっきからあなたはなんなのよ……私に姉なんていない。人違いでしょ」

「お姉ちゃんがのこと見間違えるわけないじゃん！　でもでもそうだよね。まだ生まれてから一年もってないもんね？　お姉ちゃんのことがわからなくてもしかたないよね」

「は？　私、十七歳なんだけ── 」

「うわぁ！　ちゃんとれるなんて偉いね。腕しかないのにちゃんと歩けるのもすごいよ！　でも呼吸だなんて有機生命体のごとしなくていいんだよ？　擬態も度が過ぎるとバカになっちゃうから、やめたほうがいいって。だからね、妹ちゃん。妹ちゃんである腕だけで一緒に帰ろ？　体が肉袋なんて不便だもん！　赤にもなってない肉は素材としてはゴミだよ？　む価値もないって。大丈夫。お姉ちゃんが妹ちゃんを素敵な色合いに育てるから安心して任せて。ね？　ね！」

　サハラが変な人にまれていた。

　義肢であるサハラの右腕に絡みついていて体を引っつけているのは、色の肌をしたグラマラスな女性だ。サングラスをかけているため、目元はえないが相当な美人であることは間違いない。

「……誰？」

「知らないわよ！」

　絡まれている当人であるサハラも心底うんざりしているようだ。

　変なのが増えた。どう収拾をつけようかと眉間にを寄せる。

「んん？」

　サハラに絡んでいた褐色美人が、マヤに視線を止めてサングラスをとった。

　メノウとサハラが同時に息をむ。

　宝石をそのままはめ込んだのかと錯覚するほど透き通った、マリンブルー。澄み切った海色の瞳孔だけならば美しいと見とれるだけですんだ。

　問題は、人間ならば白目であるはずの部分がに似た黒い輝きになっているところだ。

　人体ではまず見られない特徴に、サハラが、ぎょっと身を引こうとする。

　人に劣らぬ知性。ほぼ完全な擬態。導力の発露は感じられないが、間違いない。

　三原色の魔導兵だ。

　サハラが慌ててメノウたちのもとに近寄る。原色の魔導兵の中でも、三原色がった魔導兵は出会えば死を覚悟しろと言われている人類の敵だ。

　前触れなく登場した存在へ警戒を高めるメノウをよそに、マヤと褐色美人は互いを見て顔をしかめる。

「南の生ゴミじゃん。うわ、ばっちぃ。あんなのに近づいたら腐っちゃうよ、妹ちゃん」

「ね、サハラ。あたしの下僕がなんで東のスクラップなんて拾ってきたのかしら？」

　南と東。

　二つのから派生した存在に絡まれ憑かれて救いを求めるサハラから、メノウはそっと目線をらした。